

特集 特攻の思想(第三回)

もし、貴族生き残ったら、戦闘機の爆撃を体当たりしなければならなかった事実を、きっと後世に伝えてくれ

陸軍特別攻撃隊「八紘隊」馬場駿青少尉

日本政治思想史
臨時代講 川島高峰

2002.10.24

全体の見取り図

「神風」の歴史

文化史的、精神史的背景

検証 菅原道大蔵『特攻の思想』と三村文男『神なき神風』 ←今日の講義内容、様々な遺書・自決の対比から考えます

911 テロと KAMIKAZE

宇垣纏海軍提督 私兵特攻 参考 川島高峰『敗戦』

「過去半歳に亙る麾下各隊の奮戦に拘らず、驕敵を撃破し神州護持の大任を果すこと能はざりしは本職不敏の致すところなり。本職は皇国無窮と天航空部隊特攻精神の昂揚を確信し、部隊々員が桜花と散りし沖縄に進攻、皇国武人の本領を発揮し驕敵米艦に突入撃沈す。指揮下各部隊は本職の意を体し、来るべき几ゆる苦難を克服し、精強なる国軍を再建し、皇国を万世無窮ならしめよ。

天皇陛下万歳

昭和二十年八月十五日一九二四 機上より」

突入時、最期の打電「ワレ奇襲ニ成功セリ」 辞世 「これでよし 百万年の 涅槃かな」

特攻の出撃命令 統帥権干犯行為

「軍の命令は、すべて、天皇陛下のご意思である。命令に体当たり攻撃の文字を使えば、天皇陛下が、それを命ぜられたことになる。命令にその文字を使わなかったのは、どこまでも、体当たり攻撃は天皇陛下のご意思ではなかったことにするためである。これは、体当たり攻撃部隊の編成を計画した大本営の当事者自身が、体当たり攻撃は非道の方法であって、天皇陛下が命令されてはならないことだと自覚していたからである。あくまで、天皇陛下の神聖をおかすのを、恐れなければならなかった」（高木俊朗『陸軍特別攻撃隊』）

陸軍第六航空軍 司令官 菅原道大 陸軍大将

「宇垣提督が特攻出撃したというニュースは、第六航空軍のあいだにたちまちひろがった。六航軍司令官の菅原道大中将は沖縄作戦中、最後の特攻機で自分も出撃するつもりだとの約束を繰り返しながら、陸軍特攻機一六七三機を送り出していた。最後の出撃により死ぬ機会をあたえてほしいと要求する若い空中勤務者につつかれて、高級参謀の鈴木京大佐は重爆一機を用意するように命じた。.....鈴木が菅原中将に『一機用意いたしました。鈴木もおとします』と言った。この申し出に、明らかにショックを受けた菅原は低い声で、たとえ宇垣が死ぬことにきめたとしても、自分にとってはこれからの後始末が大事だと答えて、『死ぬばかりが責任を果たすことにならない。それよりは後の始末をするほうがよい』と語った」

デニス・ウォーナー、ペギー・ウォーナー『神風』一九八二年、時事通信社

戦後、文春の取材に対し

「『特攻隊で飛んだ人たちのことを悪くいわないで下さい。あの青年たちは誰も彼もが立派だった。神々しくすらあった』そして、いきなり板の間に両の手をつくと、七十歳を越えたと思われる老人は、そこにひれ伏した。『悪いのは大本営の高級将校とか私たちなのです。私たちは何といわれてもいい。犬畜生とののしられても決してうらみません…だが、青年たちのことは…』 語尾は、涙にくもって声にならなかった。思えば、命ぜられて特攻隊司令官となったこの老人も、また悲劇の人であった」

『週刊文春』1961←前傾、高木書より

三村文男 「ああまたしても「悲劇」か、という詠嘆は、私だけのものではあるまい。『特攻の悲劇を作り出した命令者は悲劇の人物でなければならない』という特攻関係ジャーナリズムの鉄則があるようだ。」

陸軍航空将校 藤井権吉少佐の自決 資料B4 両面刷を参考

名言とされる言葉

「棺を蓋うて定まる、とか、百年の後に知己を得る、というが、己のやったことは、棺を蓋うても定まらず、百年の後にも知己を得ないかも知れんな」(大西瀧治郎中将)

草柳大蔵「この言葉を耳にしたとき、私は男の心情のきしみを聞く思いがした。大西中将は暴将といわれたことにひと言も弁明せず、特攻の創始者という汚名を一身に引受けて、黙って死んでいったのだ。」

三村文男「『生みの親』とはよく不用意に使われる言葉で、自己矛盾だ。殺すために生む親はない。隊員が一人でできれば一人、二人でできれば二人、できるたびに殺してゆく特攻の『生みの親』とはいったい何だろう。親と言いたければ鬼子母といえよ。他人の子を取って喰う鬼子母だ。大西には『特攻生みの親』より「特攻鬼子母のほうがふさわしい」

川島高峰「こういう美学に酔っているうちは、もう一度、馬鹿な命令を繰り返しかねない」

「皆はすでに神である。神であるから欲望はないであろう。が、もしあるとすれば、それは自分の体当りが無駄ではなかったかどうか、それを知りたいことであろう。しかし皆は永い眠りにつくのであるから、残念ながら知ることもできないし、知らせることもできない。だが、自分はこれを見とどけて、必ず上聞に達するようにするから、安心していってくれ」(1944/10/20 大西瀧次郎、出撃前訓示)

↓

特攻隊 神よ神よ とおだてられ」(『雲ながるる果てに』、ある隊員の辞世の句)

大西瀧次郎の自決

大西瀧次郎 遺書(改行位置は原典による)

特攻隊の英霊に日す	次に一般青壮年に告ぐ	諸子は国の宝なり
善く戦ひたり	いましめ	平時に処し猶ほ克く
深謝す 最後の勝利を信じつつ肉	我が死にして軽拳は利	特攻精神を堅持し
弾として散華せり然れ	敵行為なるを思ひ	日本民族の福祉と世
共其の信念は遂に達	聖旨に副ひ奉り自	界人類の和平の為
成し得ざるに至れり	重忍苦するの誠とも	最善を尽せよ
吾死を以て旧部下の	ならば辛なり	
英霊と其の遺族に謝せ	隠忍するとも日本人た	海軍中将大西瀧治郎
んとす	るの矜持〔矜持〕を失ふ勿れ	

特攻の戦果、散華、犬死

最近の日本側による調査によると、太平洋戦争終盤で「体当たり」攻撃により被害を被った連合国軍の艦船の総計は、撃沈が空母三隻を含む五十七隻。重大な損傷により戦争期間中、戦線復帰が出来なかった艦船は正規空母等の空母六隻を含め一〇八隻。さらに八四隻の他の海軍艦船が、船体に大破を受けるか、あるいは多数の死傷者をだすか、もしくは人的、物的の両面に大きな被害をうけた。そして、二二一隻が小破を被り、総計で四七〇隻の艦船に損害を与えた。カミカゼ刊行委員会『写真集 カミカゼ 陸・海軍特別攻撃隊』上巻、KKベストセラーズ(一九九六)、一九頁。最近のアメリカ側の研究については、D.M. Giangreco, "The Truth About Kamikazes," in Naval History (May-June 1977), pp.25-30.

三村文男

「正しい国だから愛する、正しい国だから誇りをもつ、正しい国ならばまもる、というものでもないだろう」